

本願寺遺跡発掘調査報告書

— 県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

1989・3

米原町教育委員会



序

米原町の西部、天野川南岸ではここ数年来、県営ほ場整備事業が行なわれています。この事業に伴いまして、米原町教育委員会は埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

調査の結果、従来水田の地下深く眠っておりました遺跡が明らかとなり、米原町の原始・古代の姿を具体的に知ることができました。

今回調査を実施いたしました、上多良の本願寺遺跡もその一つです。この遺跡は当初寺院跡ではないかと推定されておりましたが、調査の結果、古墳時代の集落跡であることが判明いたしました。ここにその成果を報告書としてとりまとめました。この報告書が地域の歴史を解明するうえで、また埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、御活用いただけましたら幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にあたり、ご理解とご協力を賜わりました、滋賀県教育委員会文化財保護課、滋賀県長浜県事務所土地改良課、および地元関係者の方々に対しまして厚く感謝の意を表します。

平成元年 3 月

米原町教育委員会

教育長 杉村 馨

例 言

1. 本書は米原町内における昭和63年度県営ほ場整備事業（天の川西部南地区上多良第2工区）に伴う本願寺遺跡の発掘調査に関する報告書である。
2. 調査は昭和62年12月12日より12月25日まで試掘をおこない、その結果改めて昭和63年4月19日より5月30日まで本調査をおこなった。
3. 出土遺物の整理、復元作業および報告書作成業務については、昭和63年5月31日より、平成元年3月31日までの間実施した。
4. 調査は滋賀県の依頼により、米原町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長	福田 定観 (昭和63年10月11日まで)
	"	"	杉村 馨
調査事務局	"	社会教育課 課長	後藤 法泉 (昭和62年度)
	"	"	筒井嘉寿彦
	"	課長補佐	前川幸太郎 (昭和62年度)
	"	"	山本 一幸
	"	主任	清水 克章 (昭和62年度)
	"	"	中尾 正寿 (")
	"	"	藤原 幸子
	"	主事	池田 仁
調査担当	"	技師	中井 均
調査補助員	中川和哉 (現京都府埋蔵文化財調査研究センター)		宮川哲郎
	(現甲良町教育委員会)		細川英雄 小林正伸
調査作業員	川森茂子	川森かつ子	北川光雄

5. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては調査担当者、調査補助員、作業員がおこなった。
6. 自然遺物については、名古屋大学渡辺誠氏に鑑定を依頼した。
7. 遺物の写真撮影については寿福滋氏を頼した。
8. 本書の執筆は、4-(2)自然遺物を渡辺誠が、それ以外の執筆および編集は中井均がおこなった。

目 次

目 録

序 文

例 言

1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
3. 調査の経過	6
4. 調査の結果	7
(1) 遺構	7
(2) 遺物	17
5. 調査のまとめ	35

挿 図 目 次

fig 1	調査地周辺図	3
fig 2	トレンチ配置図	6～7
fig 3	12トレンチ遺構平面図	7
fig 4	16、17トレンチ遺構平面図	8
fig 5	16トレンチSK1、P2実測図	9
fig 6	17トレンチSK01実測図	10
fig 7	18トレンチ遺構平面図	11
fig 8	18トレンチSB01実測図	11
fig 9	19トレンチ遺構平面図	12
fig 10	19トレンチSX01実測図	12
fig 11	24トレンチ遺構平面図	13
fig 12	24トレンチSK03、SK05、P33実測図	14
fig 13	25、27、29、30トレンチ遺構平面図	16

fig 14	トレンチ土層断面図	16~17
fig 15	出土遺物実測図(土師器)	20
fig 16	出土遺物実測図(土師器)	21
fig 17	出土遺物実測図(土師器)	22
fig 18	出土遺物実測図(土師器)	23
fig 19	出土遺物実測図(須恵器)	24
fig 20	出土遺物実測図(木製品)	26
fig 21	出土遺物実測図(木製品)	27
fig 22	24トレンチSK05出土網代	28
fig 23	出土遺物実測図(石器、金属器)	29

表 目 次

第1表	桃核計測値一覧表	32
第2表	ドングリ類の分類	33

図 版 目 次

PL 1	遺跡	(1) 調査地全景 (西から) (2) 調査風景
PL 2	遺跡	(1) 12トレンチ遺物出土状況 (2) 12トレンチ全景 (南から)
PL 3	遺跡	(1) 15トレンチ上水道施設検出状況 (南から) (2) 18トレンチ遺物出土状況

- PL 4 遺跡 (1) 18トレンチSB01 (西から)
(2) 18トレンチSB01 (北から)
- PL 5 遺跡 (1) 18トレンチ北半区 (北から)
(2) 19トレンチSX01 (南から)
- PL 6 遺跡 (1) 19トレンチ遺物出土状況
(2) 24トレンチP333遺物出土状況
- PL 7 遺跡 (1) 24トレンチSK05
(2) 24トレンチSK05遺物出土状況
- PL 8 遺跡 (1) 24トレンチSK05網代出土状況
(2) 26トレンチP46木製品出土状況
- PL 9 遺跡 (1) 30トレンチ遺物出土状況
(2) 試掘1トレンチ木製品出土状況
- PL 10 遺物 (土師器) 1:26トレンチ, 2, 3:24トレンチSK03, 4
:16トレンチ, 6:12トレンチ, 7:24トレンチ
SK05
- PL 11 遺物 (土師器) 10:16トレンチ, 11:31トレンチ, 12:試掘13ト
レンチ, 13:27トレンチ, 14:19トレンチ, 16
:29トレンチSDA, 17, 22:25トレンチ
- PL 12 遺物 (土師器) 19:15トレンチ, 20, 23:19トレンチ, 21, 25:
18トレンチ, 24:16トレンチ
- PL 13 遺物 (土師器) 5:15トレンチ, 8:19トレンチ, 9:25トレン
チ, 15:30トレンチ, 18, 26, 29:16トレンチ,
27:17トレンチSK01, 28:27トレンチ, 34:12
トレンチ
- PL 14 遺物 (土師器) 30:27トレンチ, 31:12トレンチ, 32, 35:18ト
レンチ, 33:試掘14トレンチ, 36:19トレンチ,
37:試掘13トレンチ, 38:試掘2トレンチ
- PL 15 遺物 (土師器) 39:27トレンチ, 40:12トレンチ, 41:18トレン
チ, 42:17トレンチSK01, 43, 45:16トレン
チ, 44:31トレンチ, 46:試掘14トレンチ

- PL 16 遺物 (土師器) 47:3トレンチ, 48:18トレンチ, 49:16トレンチ, 50:試掘16トレンチ, 51:26トレンチP46, 52:30トレンチ, 53:25トレンチ
- PL 17 遺物 (土師器・須恵器) 54:18トレンチ, 55:試掘13トレンチ, 56:16トレンチ, 57:31トレンチ, 58:24トレンチP33, 59:19トレンチ, 60:25トレンチ, 61:28トレンチ, 62:24トレンチSK05
- PL 18 遺物 (須恵器・金属器・木製品) 63:15トレンチ, 64,65:17トレンチ, 66,67:試掘1トレンチ, 76,77:18トレンチ
- PL 19 遺物 (木製品・石器) 68:15トレンチ, 69:26トレンチP46, 70,73:16トレンチ, 71:18トレンチP9, 72:18トレンチP8, 74:26トレンチ, 75:29トレンチPホ
- PL 20 遺物 (自然遺物) 1:トチノキ, 2~6:モモ, 7:同胚乳, 8:ヒョウタン仲間種子, 9:同果皮, 10:アカガシ, 11:ツクバネガシ

1. 調査に至る経過

米原町上多良には周知の遺跡として本願寺遺跡が所在している。昭和62年度県営ほ場整備事業（天の川西部南地区上多良第2工区）が計画され、本願寺遺跡がその工区内に含まれていたため、事前に発掘調査を実施する必要性が生じた。

昭和62年11月5日、滋賀県教育委員会より滋教委文保第1792号で、この本願寺遺跡の調査を米原町教育委員会に依頼があった。これを受けて、米原町教育委員会では、昭和62年11月12日付け米教委社発第276号で、調査を実施する回答を滋賀県教育委員会へ送付した。同時に11月10日付けで文化庁へ発掘調査の通知を送付した。昭和62年12月10日、滋賀県と米原町との間で発掘調査の委託契約を締結し、12月12日より調査に着手した。

調査は工事が差しせまっております、取り急ぎ遺跡の範囲を掌握し、遺構・遺物が検出されなかった部分については、即時工事に入ることとなり、遺構・遺物が検出された範囲については、改めて翌年度本調査を実施することとなった。

調査の結果、遺構、遺物の検出された範囲について、昭和63年4月1日付けで、改めて委託契約を締結し、4月19日より5月30日まで調査を実施し、以後平成元年3月31日までの間遺物の整理、復元、報告書の作成業務を実施した。

2. 遺跡の位置と環境

本願寺遺跡は滋賀県坂田郡米原町上多良に所在している。上多良集落は南方に点在する中多良、下多良とともに、天野川の自然堤防上に立地する村落である。本願寺遺跡はこの上多良集落の西側水田地帯に位置している。遺跡の北側には、江戸時代に築かれた天野川の堤防が隣接している。天野川は上多良周辺まで南下していたものが、大きく北方へ屈曲しており、堤防が築かれるまでは、幾度となく氾濫していたことがうかがえる。

調査前の地日はすべて水田であり、標高は87.8～89.3mであり、まったく起伏のない平坦地であった。

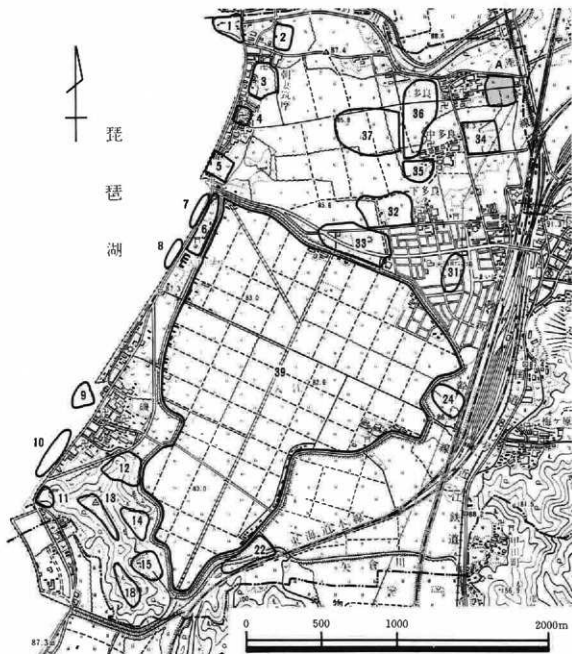
本願寺遺跡はその名の示す通り、『滋賀県遺跡地図』および『米原町内遺跡分布調査報告書』には、寺院跡として記載されていた。これは、嘉吉元年（1441）に記された、『興福寺官務牒疏』に、

「本願寺 在同郡富永莊、僧房三字、
(塚趾部)
行基菩薩開基、天平元年也、木尊八尺地藏菩薩、
右以寺院、為筑摩神供僧云」

とあり、近江町宇賀野の歡喜光寺、米原町朝妻の法性寺とともに、筑摩神社の神供僧であったことがわかる。これを裏付けるように、明治時代に遺跡の耕土中より木製小仏像が出上し、現在でも上多良の民家に祀られているとのことである。このように調査前の本願寺遺跡は古代～中世の寺院跡と推定されていた。

さて、本願寺遺跡周辺の遺跡に目を向けてみると、縄文時代では、筑摩個遺跡が所在している。筑摩個遺跡からは縄文時代早期末の条痕文土器をはじめ、中期、後期、晩期の土器や石器が出上している。その盛期は中期と考えられ、出土遺物のなかでも船元式、里木式土器の出土が目立っている^①。また、旧入江内湖をはさんだ南方、礪山山麓に所在する礪山城遺跡からは、高山寺式土器をはじめとする早期の土器群が多量に出上している^②。この他立花遺跡からも中期の土器が出土しており、入江内湖が形成される以前の低湿地には滋賀県下でもいち早く人々が村落を形成した場所であったといえよう。

弥生時代では、上多良の南方に立花遺跡が所在している。ここでは弥生時代前期中



- A. 今回調査地
- | | | | |
|-----------|-----------------|------------|---------------|
| 1. 朝雲池跡遺跡 | 2. 朝雲池跡 | 3. 朝雲城跡 | 4. 法善寺遺跡 |
| 5. 今江寺遺跡 | 6. 坂摩別荘跡遺跡 | 7. 高塚湖岸遺跡 | 8. 入江小学校前湖岸遺跡 |
| 9. 磯洲岸遺跡 | 11. 磯崎古墳群 | 12. 磯山城遺跡 | 13. 磯山城跡 |
| 10. 磯洲岸遺跡 | 14. 堂谷遺跡 | 15. 袖塚遺跡 | 18. 虎ヶ崎跡 |
| 18. 虎ヶ崎跡 | 22. 入江内湖西野遺跡 | 24. 米原駅西遺跡 | 31. 米原駅前遺跡 |
| 32. 下定袋遺跡 | 33. 中多良入江内湖周辺遺跡 | 34. 中多良遺跡 | 35. 龍華寺遺跡 |
| 37. 筑摩館遺跡 | 39. 入江内湖遺跡 | | 36. 立花遺跡 |

(遺跡番号は米原町教育委員会発行「米原町内遺跡分布調査報告書」1988 と一致する)

fig 1 調査地周辺図

段階に相当する壺、甕、蓋等が出土しており、湖北地方における前期の良好な資料となっている。立花遺跡は中期にも引続き存続しており、東海地方など外来系の土器も多量に出土しているほか、玉造り関係の遺物も出土している。^④

古墳時代では、本遺跡の南方に中多良遺跡が所在しており、布留式土器を多量に出土している。^⑤また蘭華寺遺跡、下定使遺跡の下層からも庄内段階から布留式段階に至る遺物が出土している。^⑥さらにこれらの遺跡群の南方に広がる入江内湖は全域が遺跡とされているが、その中心は古墳時代と考えられる。戦前の干拓時には須恵器、古式土師器などの土器類のほか、石剣、勾玉、管玉などが採集されている。特に須恵器の中に伽耶式土器が3点認められることは注目される。^⑦

さらに入江内湖遺跡では西野地区で発掘調査が実施され、古墳時代の掘立柱建物などの遺構が検出されているほか、丸葎地区、行司町地区では、布留式に併行する多量の木製品が出土している。^⑧

このような集落に対して古墳そのものの数は非常に少ない。わずかに入江内湖の南岸に横たわる礪山の丘陵先端部に磯崎古墳が知られているにすぎなかった。しかし最近の発掘調査で、上多良集落の西側平野部分で大乾古墳群が検出された。試掘調査であったため、その全様は不明であるが3基以上からなる群集墳と考えられる。このうち1号墳は直径22mを測る円墳で、6世紀初頭の円筒埴輪、形象埴輪が出土している。^⑨

歴史時代では、入江内湖遺跡で奈良時代末から平安時代に至る土器が採集されており、数点の墨書土器も含まれている。ここでは皇朝十二銭のうち、和同開珎、神功開宝も採集されている。筑摩湖岸遺跡では発掘調査の結果、奈良時代末の黒書土器や、緑釉、布目瓦、硯、神功開宝、刀子、斎串などが出土しており、宮内省大膳職に属する筑摩御厨の跡ではないかと推定される。^⑩下定使遺跡では、やはり数点の黒書土器や木履が出土しており、在地貴族の屋敷などが想定される。^⑪

寺院跡に関しては、本遺跡のほかに蘭華寺遺跡が知られ、部分的な発掘調査であり寺院に伴う遺構や遺物は検出できなかったが、瓦が1点出土している。^⑫また入江内湖南岸の礪山山麓では白鳳時代の鴟尾が2点出土している。

このように本遺跡の周辺は町内でも縄文時代から平安時代に至る遺跡の密集地帯であり、特に古墳時代は、付近一帯に集落が点在していたと考えられる。

- 注 ① 米原町教育委員会『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』1987
- ② " 『礪山城遺跡』1986
- ③ " 『立花遺跡発掘調査報告書』1988
- ④ " 『中多良遺跡発掘調査報告書』1989
- ⑤ 前掲 ①
- ⑥ 磯崎文五郎氏採集による。現在琵琶湖干拓資料館で保管、展示されている。
- ⑦ 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 1977
- 米原町教育委員会『入江内湖遺跡発掘調査報告書』1987
- " 『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書』1988
- ⑧ " 『一般国道8号（米原バイパス）関連遺跡試掘調査報告書』1989
- ⑨ " 『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』1986
- ⑩ 前掲 ⑧
- ⑪ 前掲 ①

3. 調査の経過

今回の調査では、ほ場整備工区内に田面の切り下げ計画はなかったため、排水路部分のみにかぎって調査を実施することとなった。当初よりは場整備施行が緊急であったため、前年度に取り急ぎ水路線内で試掘を実施し、遺跡の範囲を決定し、遺構・遺物等検出されなかった個所については、工事を実施する計画となっていた。試掘は4×5mのグリッドで、路線内に計19ヶ所設定した。

この試掘調査の結果にもとづき、昭和63年4月より本調査を実施した。調査は地表面より遺構面もしくは遺物包含層まで、0.4mのバックホウを用いて掘削し、以後人力によった。本調査は幅4mのトレンチとし、湧水が激しいため、部分的にセクションの断面を残し、排水が簡単にできるようにし、その断面でトレンチ番号を順次設けていった。このようにして調査をおこなったトレンチは30ヶ所にのぼった。

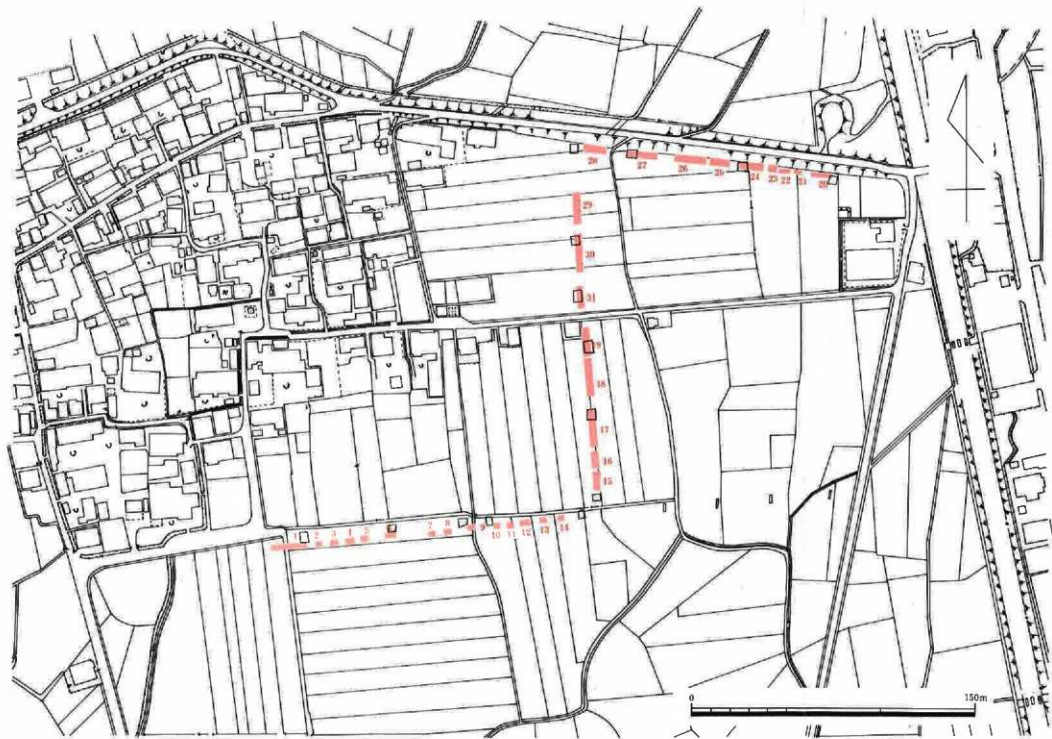


fig 2 トレンチ配置図 (黒は試掘トレンチ、朱は本調査トレンチ)

4. 調査の結果

(1) 遺構

・12トレンチ

SD01 12トレンチでは南北に流れる自然流路SD01を検出した。幅はトレンチ外へ伸びているため不明である。深さは検出面より最も深い所で0.75mを測る。埋土は腐植土と粘土より成り、滞水していた溝と考えられる。埋土中より布留式土器が出土しており、古墳時代前半の自然流路と考えられる。排水路のU字溝が地表面より1.8mまでの部分に入るため、これ以上調査はできず、東西幅は確認することができなかった。

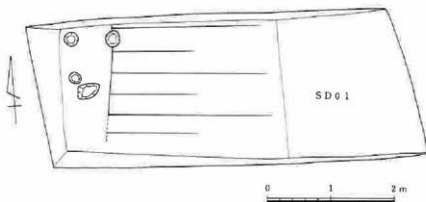


fig 3 12トレンチ遺構平面図

・15トレンチ

上水 15トレンチの北壁断面で、上水道施設(簡易水道)を検出した。竹製のもので、接合部に針葉樹をくり抜き、面取りをした木材を用いていた。上水道施設検出層では出土遺物がなく、時期は不明であるが、おそらく近世～現代の遺構と見られる。付近では、類似する遺構が、近江町法勝寺遺跡で検出されているほか、中主町、日野町、近江八幡市等でも数多く検出されている。

・16トレンチ

SK1 16トレンチの北側で検出された土壇で、平面は楕円形を呈し、一部は調査区外へのびる。埋土は黒色粘土で、古墳時代の土師器高坏などが出土した。

包含層中からは土師器甕(4)、(10)、小型丸底壺(24)などの土器のほか、砂岩製の砥

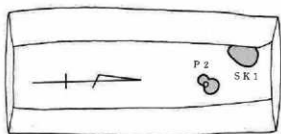
石(73)や蛇状の木製品(70)なども出土している。

・17トレンチ

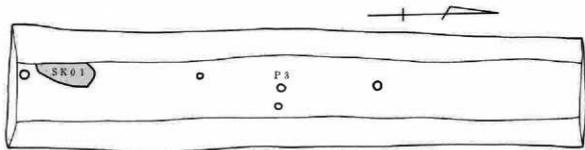
SK01 17トレンチの南端で検出した土壇で、長さ2.35mを測る。平面は楕円形を呈し、一部調査区外へのびる。埋土は黒色粘土で、深さは26cmを測る。土壇の上には人頭大の石が据えられていた。埋土より、(27)、(42)などの土師器高環が出土している。

P3 17トレンチのほぼ中央で検出したビットP3は、直径30cmの小形のものであるが、中に柱材が遺存していた。建物規模などは不明。

17トレンチでは他に直径20~30cmのビットが検出されている。また包含層中からは(64)、(65)などの須恵器有蓋短脚高環が出土している。



16トレンチ



17トレンチ

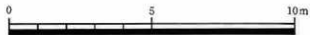


fig 4 16,17トレンチ遺構平面図

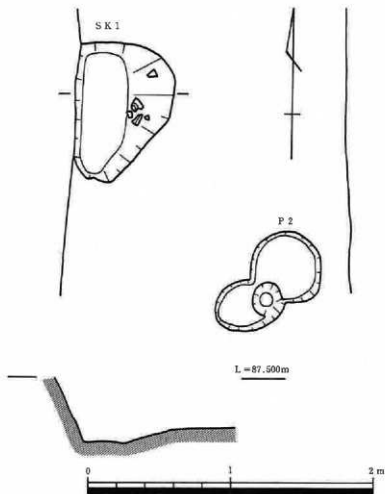


fig 5 16トレンチSK1,P2実測図

・18トレンチ

SB01 18トレンチの南端で検出された掘立柱建物である。調査区が狭いため全様は不明。柱穴が2ヶ所残っており、それぞれ柱痕が残っていた。北側の柱穴は掘り方の周囲に板材をあてていた。掘り方埋土中よりは古墳時代後半に相当すると考えられる土師器の小破片が数点出土している。

SD01 トレンチのほぼ中央で検出した、東西方向の溝である。幅は1.7m、深さは18cmを測る。埋土は黒色粘土で、少量の古墳時代後半の土師器小片が出土している。このSD01以北にビットが多数検出されている。

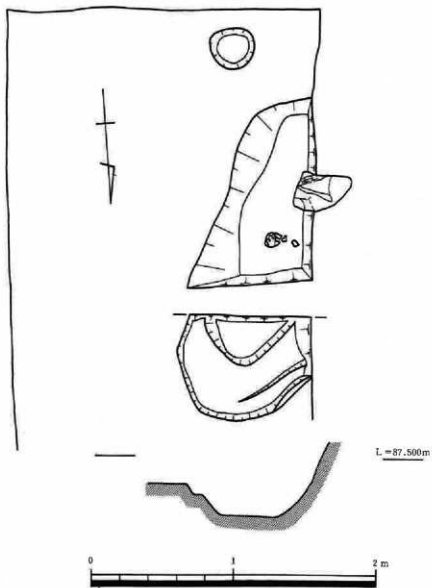


fig 6 17トレンチSK01実測図

18トレンチでも包含層中から、(21)、(25)の小型丸底壺、(32)、(35)、(41)、(48)、(54)などの土師器高坏が出土している。また表土中よりは(76)、(77)などのキセル雁首、吸い口が出土している。

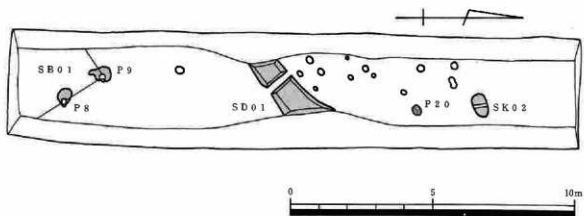


fig 7 18トレンチ遺構平面図

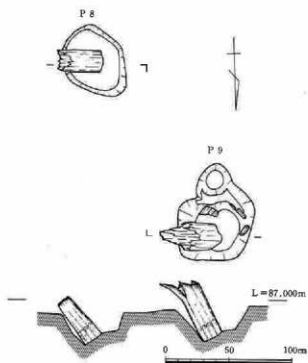


fig 8 18トレンチSB01実測図

・19トレンチ

SX01 トレンチのほぼ中央の東端で検出した集石遺構である。挙大の河原石を集めたもので、南北49cm、東西60cmを測る。石をとり除いたが下部に遺構は認められず、その性格、時代は不明である。ただこの集石のすぐ横で同層位より、古墳時代の高坏や甕などが出土している。

19トレンチでは包含層中より、脚付甕(14)、小型丸底壺(20)、(23)、甕(8)、高坏(36)などの土師器のほか、須恵器の坏蓋(59)も出土している。

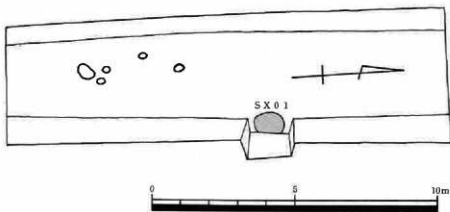


fig 9 19トレンチ遺構平面図

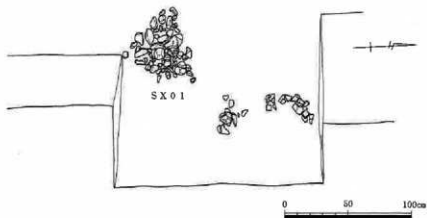


fig 10 19トレンチSX01実測図

・24トレンチ

SK03 トレンチの東端で検出した土壇で、ほぼ円形に近い形状を呈する。南北3.4mを測り、深さは13cmを測る。床面より、(2)、(3)などの土師器甕が出土しており、また焼けた木材が土師器周辺から出土している。

P33 P33はSK03のほぼ中央に掘り込まれたピットで直径1.2m、深さ20cmを測る。土師器甕の小片とともに須恵器環蓋(58)が出土している。またSK03同様一部炭化した木材も認められた。このような状況からSK03に伴う柱穴ではないかと考えられる。

SK05 SK05はSK03の西側に隣接するところで検出された土壇である。形状は円形に近い楕円形を呈する。南北1.53m、東西1.31mを測る。深さは検出面より76cmを測る。

底部南西隅に挙大の礎を6個据えて、その上に綱代を置いていた。埋土は黒色粘土で、綱代周辺の埋土中に多量の樹種が含まれていた。樹種はツクバネガシ、アカガシ等の照葉樹の種子であった。またヒョウタンの樹皮も含まれていた。

土器は埋土中にまったく含まれておらず、底部中央に、土師器小型甕(7)と須恵器環(62)の2点があっただけである。なお検出面の肩部で板材が出土している。

このようにSK05は、綱代がザル状容器になる可能性が高く、その周辺から種子が多く出土した状況から、貯蔵穴としての性格が考えられる。肩部より出土した板材あるいは蓋として利用されたことも考えられよう。

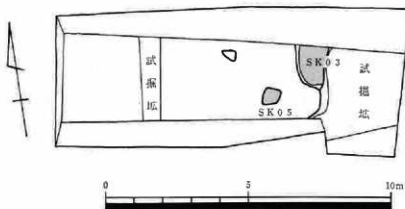


fig11 24トレンチ遺構平面図

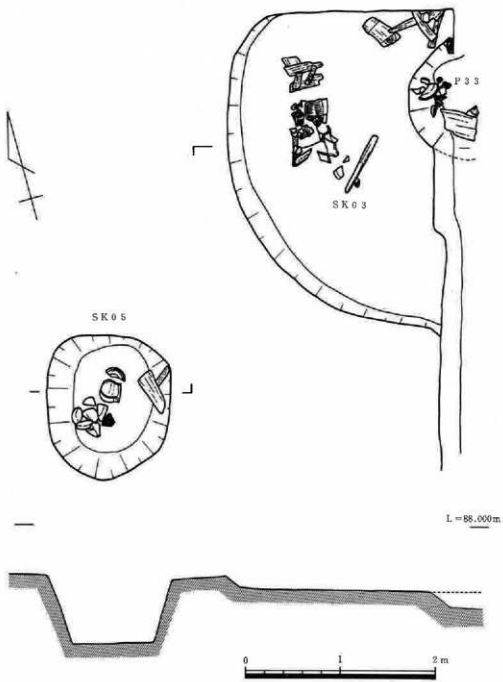


fig 12 24トレンチSK03,SK05,P33実測図

・25トレンチ

25トレンチではほぼ全域にわたって、ビットを検出したが、建物など規則的に配列されるものはなく、その性格は不明である。いずれのビットからも、古墳時代と考えられる土師器の小破片が若干出土している。

また包含層からは壺(17)、小型丸底壺(22)、甕(9)、高坏(53)などの土師器、須恵器坏蓋(60)が出土している。

・26トレンチ

P46 直径40cmを測る円形のビットで、中に木槌(69)が立てかけられており、底に土師器甕の破片や高坏(51)などが出土している。

26トレンチの遺構面からは、押しつぶされた形で、土師器甕(1)が出土している。また包含層中よりは、砥石(74)も出土している。

・27トレンチ

27トレンチでは、8ヶ所のビットを検出した。柱間の通るものはなく、その性格は不明である。

包含層中からは、土師器高坏(28)、(30)、(39)などが出土している。

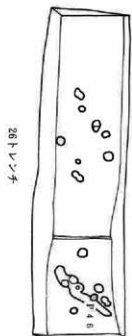
・29トレンチ

Pホ 直径60cmを測る隅丸方形のビットで、大形の砥石(75)が出土している。

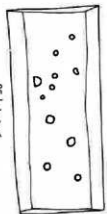
SDA 29トレンチのほぼ中央で検出した東西方向に流れる溝。幅7mを測り、深さは20cmを測る。あるいは沼状の落ち込みとも考えられる。埋土中より壺(16)が押しつぶされた状態で出土した。

・30トレンチ

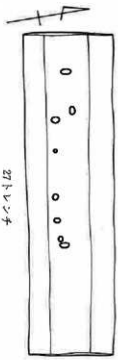
30トレンチでも多数のビット・土壇を検出したが、調査区が狭いため、その性格、規模は不明である。なお包含層中からは、壺(15)や高坏(52)などが出土している。



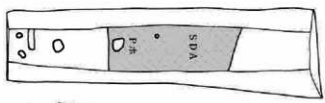
26トレンチ



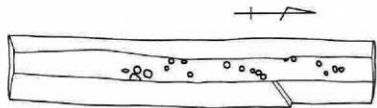
25トレンチ



27トレンチ



29トレンチ



30トレンチ

fig 13 25, 26, 27, 29, 30トレンチ遺構平面図

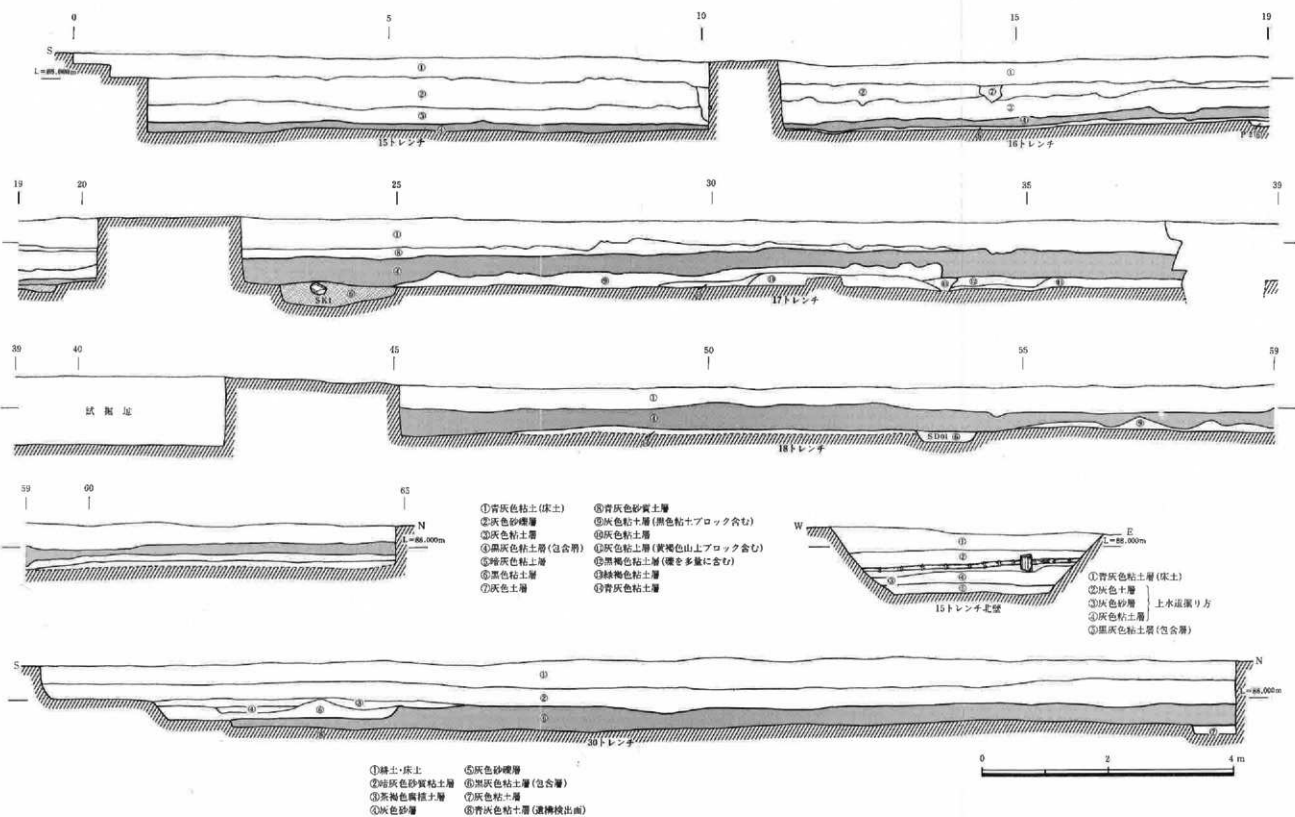


fig 14 トレンチ土層断面図

・試掘1トレンチ

試掘1トレンチでは、試掘最初のグリットであったため、土層確認のため、深掘りをおこなった。この結果、現地表面下2.0m(標高85.8m)で、大形の建築部材(67)が出土した。部材は横たわっており、この下に、弓状に弯曲した枝材が数本ならべられた状態で出土している。出土した層位は、腐植土層(スクモ層)で、遺構は認められなかった。同層中からは、古墳時代後半の須恵器小形壺が出土している。

・試掘6～10トレンチ

調査対象区域の東側に設定した、6～10トレンチでは、耕土直下に礫層が堆積していた。この礫層は地表下1.8mまで続いており、遺構、遺物ともに認められなかった。この状況は、本願寺遺跡の南方に所在する中多良遺跡の調査結果と一致する。調査区の北端の東西トレンチでは、遺物、遺構が認められていることから、本願寺遺跡は、北東から南西にかけて、天野川の氾濫原であったことが判明した。

(2) 遺物

・土器

土師器

甕(fig15, fig16-8～14)

(1)は26トレンチ包含層から出土した甕で、「く」の字にたちあがるシャープな口縁を有し、端部は直にたちあがる。長胴の甕である。

(2)、(3)は24トレンチSK03より出土した甕である。(2)は(1)と同様のやや長胴の形状を呈している。口縁の屈曲はゆるやかとなり、シャープさに欠け、端部も丸くおさまっている。(3)は小型の甕で、丸底となり、体部も球状となる。外面全体に粗いハケを施し、内面はケズリとする。

(4)は16トレンチ包含層より出土した甕で、「く」の字状に開く口縁が、端部で屈曲して直にたちあがり、「受け口状」を呈している。

(5)は15トレンチ包含層より出土した甕で、体部より丸味をもって、「く」の字状に開く口縁を有する。外面全体に粗いハケを施し、内面は口縁部ヨコハケ、体部をケズリとしている。焼成は緊緻で、胎土中に多くの金雲母を含んでいる。

(6)は12トレンチ包含層出土の甕で、器壁が厚い粗製品である。胎土中に多量の石粒を含んでいる。内外面ともにナデ仕上げとなる。

(7)は24トレンチSK05の底部より出土した、小型の丸底甕である。体部よりわずかに開く、短い口縁をもつ。外面凸凹があり、指頭による圧痕が残る、粗製の土器である。内面口縁部は指ナデとなり、体部は全面ケズリを施している。

(8)は19トレンチ包含層から出土した甕で、体部からやや開く、直上気味にたちあがる口縁を有している。外面は粗いハケが施されている。

(9)は25トレンチ包含層から出土した甕で、シャープに「く」の字に開く口縁を有している。長胴甕の口縁部と考えられる。

(10)は16トレンチの包含層から出土した甕で、丸味を帯びたいびつな口縁をもつ。胴部は下半部でふくらむ、長胴の形状を呈している。体部もいびつで、全面をへら状工具で粘土を引き伸ばしたような調整が認められる。内面に粘土を巻き上げた痕跡が残り、全面にケズリを施している。

(11)は31トレンチの包含層から出土した甕で、肩のはる体部から直上に近いたちあがりを示す口縁が、端部で外方に開く。外面は粗いハケを施し、内面も粗いケズリとなる。

(12)～(14)は脚付甕の脚部と考えられ、(12)が武庫13トレンチ、(13)が27トレンチ(14)が19トレンチの包含層より出土している。(14)は脚部中央付近までハケが施されており、S字状口縁を有する甕になるものと考えられる。

壺(fig16-15～17)

(15)は肩部より外方に開く広口壺の口縁部と考えられるもので、30トレンチの包含層から出土している。

(16)は29トレンチSDAから出土したもので、小型の壺の体部である。底部は平底となり、器壁は非常に薄い。

(17)は25トレンチ包含層出土の平底の壺の底部である。

小型丸底壺(fig17-18～25)

(18)、(24)は16トレンチ、(19)は15トレンチ、(20)、(23)は19トレンチ、(21)、(25)は18トレンチ、(22)は25トレンチのそれぞれ包含層から出土した小型の丸底壺である。

(18)は体部と口縁の高さがほぼ同じで、体部幅よりもさらに開く口縁を有している。(19)、(20)、(22)、(23)、(24)は胴部から口縁端部が「く」の字状に屈曲しており、口縁径と胴部最大径がほぼ一致するものである。(21)は口縁が直上にたちあがる。

(25)は頭部径が非常に狭くなるもので、体部は完全な球状をなしている。

器台(fig17-26-31)

(26)は16トレンチ包含層から出土した器台で、脚部に2段の円形透しを穿つ。脚部に対して、小さな受け部を有する。

(27)は17トレンチ S K01埋土より出土した器台で、器面全体をヘラケズリを施しており、脚部3方に円形透しを穿つ。

(28)は27トレンチ包含層から出土した器台で短かく大きく外方に開く脚を有している。

(29)は16トレンチ包含層から出土した器台で、受け部の口縁端部で屈曲して、段を有している。

(30)は27トレンチ包含層より出土した器台で、脚部上方に横方向のハケを施し、下方は縦方向のハケを施す。3方向に円形透しを穿つ。

(31)は12トレンチ包含層より出土した器台で、受け部と脚部の幅がほぼ等しくなる形状を呈している。脚部はざん胴で、ヘラミガキの後、3段にわたり、6条の横線を施している。3方向に大きな円形透しを穿つ。

高環(fig17-32-35、fig18-36-55)

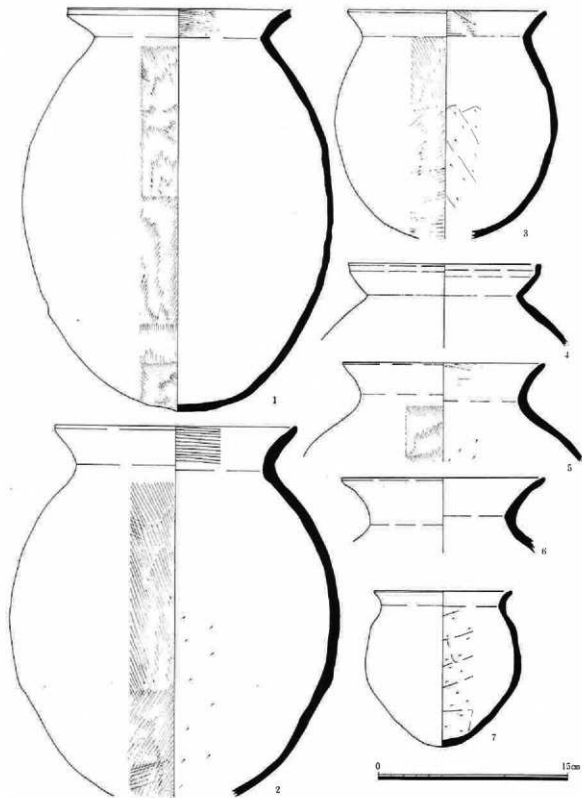
(33)は試掘14トレンチ包含層から出土した高環で、坏部が大きく深いものである。脚部は坏部に対して小さい。脚部3方向に円形透しを穿つ。

(35)は18トレンチ包含層から出土した高環の坏部で、口縁部で大きく外方に屈曲して、明瞭に稜線が認められる。この坏部は口径23.8cmを測る大形のものであるが、高さは4.9cmと浅く、皿状を呈している。

(37)、(38)、(39)、(43)、(44)は、高環の脚部であるが、脚の端部が大きく開き扁平となる。(43)は透しが認められないが、他はいずれも3方向に円形透しを穿っている。

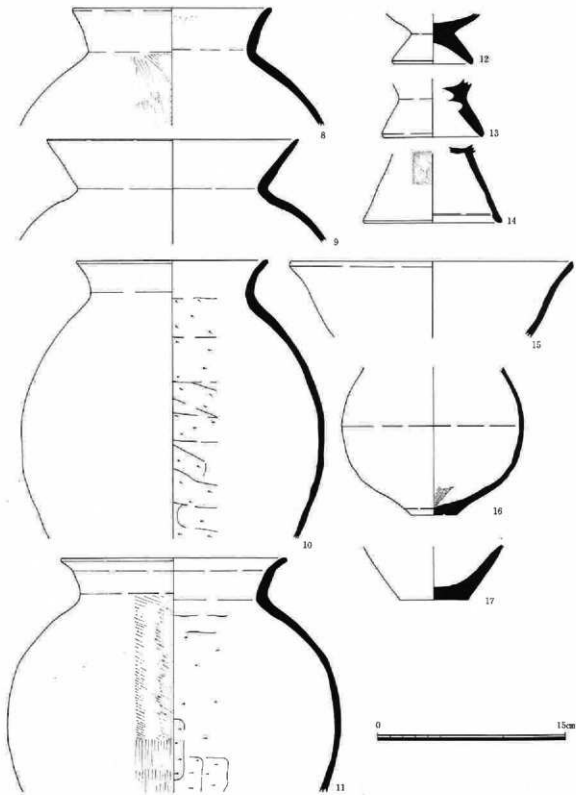
(32)、(40)、(41)、(42)は脚が笠状に開くもので、特に(40)はラッパ状を呈している。(32)、(40)、(41)は4方向より、(42)は3方向より円形透しを穿つ。

(45)~(55)は、いずれも長細い棒状の脚部に、ほぼ直角に近い形状で外反する脚端部を有する高環の脚部で、いずれも透しを設けていない。



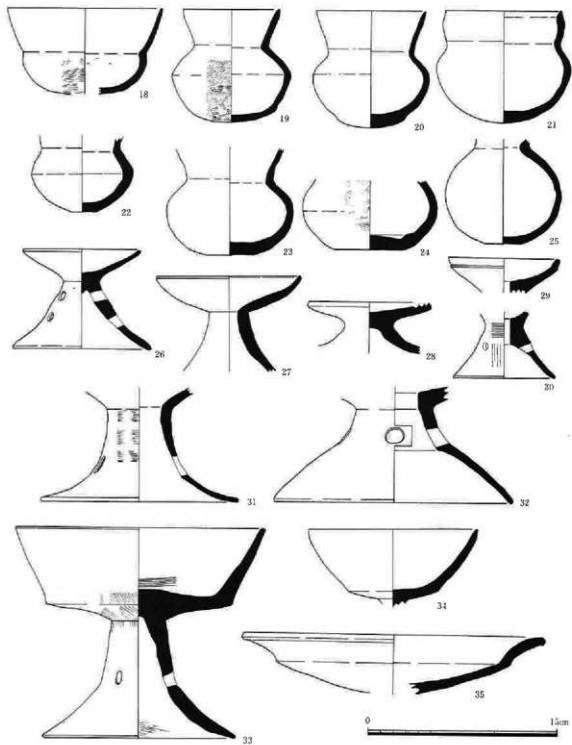
1:26トレンチ, 2,3:24トレンチSK03, 4:16トレンチ, 5:15トレンチ, 6:12トレンチ, 7:24トレンチSK05

fig 15 出土遺物実測図(土師器)



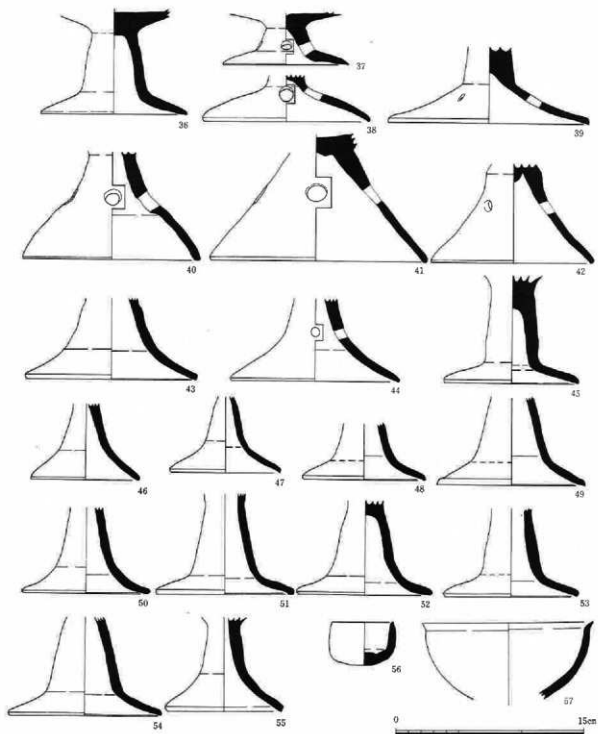
8,14:19トレンチ, 9,17:25トレンチ, 10:16トレンチ, 11:31トレンチ, 12:試掘13トレンチ, 13:27トレンチ, 15:30トレンチ,
 16:29トレンチ SDA

fig 16 出土遺物実測図(土師器)



18, 24, 26, 29: 16トレンチ, 19: 15トレンチ, 20, 23: 19トレンチ, 21, 25, 32, 35: 18トレンチ, 22: 25トレンチ
 27: 17トレンチ SK01, 28, 30: 27トレンチ, 31, 34: 12トレンチ, 33: 試掘14トレンチ

fig 17 出土遺物実測図(土師器)



36:19トレンチ, 37,55:試掘13トレンチ, 38:試掘2トレンチ, 39:27トレンチ, 40:12トレンチ, 41,48,54:18トレンチ,
 42:17トレンチSK01, 43,45,49,56:16トレンチ, 44:31トレンチ, 46:試掘14トレンチ, 47:3トレンチ,
 50:試掘16トレンチ, 51:26トレンチP46, 52:30トレンチ, 53:25トレンチ, 57:31トレンチ

fig 18 出土遺物実測図(土師器)

ミニチュア土器(fig18-56)

(56)は16トレンチ包含層より出土した、手づくねのミニチュア土器で、口径4.7cm、器高3.4cmを測る。

鉢(fig18-57)

(57)は31トレンチ包含層より出土した、土師器の鉢である。底部より丸味を帯びて外反する体部の端部をつまみあげて、口縁としている。

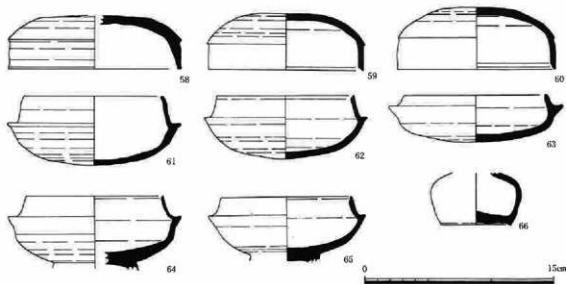
須恵器

坏蓋(fig19-58-60)

(58)は24トレンチP33の埋土より出土した坏蓋で、器高のほぼ半分を体部が占め、天井部は扁平となる。天井部半分がヘラケズリとなる。天井部と体部の境には明瞭な稜線が認められる。TK23ないし、TK47に相当するものである。

(59)は19トレンチ包含層から出土した坏蓋で(58)とはほぼ同様の形態を示す。

(60)は25トレンチ包含層から出土した坏蓋で(58)、(59)に比べて、天井部が丸くなり、天井部と体部の稜線も甘くなる。TK47に相当するものであろう。



58:24トレンチP33、59:19トレンチ、60:25トレンチ、61:28トレンチ、62:24トレンチSK05、63:15トレンチ、64、65:17トレンチ、66:試掘1トレンチ

fig 19 出土遺物実測図(須恵器)

坏身(fig19-61-63)

(61)は28トレンチ包含層から出土した坏身で、口径に比べて器高は高い。たちあがりも高く、直立する。TK47に相当するものであろう。

(62)は24トレンチSK05底部より(7)と共伴して出土した坏身で、その形状は(61)に比べて、たちあがりやや短かく、内傾している。MT15に相当するものか。

(63)は15トレンチ包含層から出土した坏身で器高は低くなり、口径は大きくなる。たちあがりも短く内傾している。TK43併行と考えられる。

有蓋高坏(fig19-64-65)

(64)、(65)はいずれも17トレンチ包含層から出土した有蓋高坏の坏部分である。たちあがりは器高の1/2を占め、やや内傾している。おそらく短脚が伴うものであり、TK47に併行する時期のものであろう。

壺(fig19-66)

(66)は試掘1トレンチ包含層より出土した、小形の壺と考えられるものである。口縁は不明であるが、頸部までの器高4.0cm、胴部最大幅7.2cmを測り、平底となる。

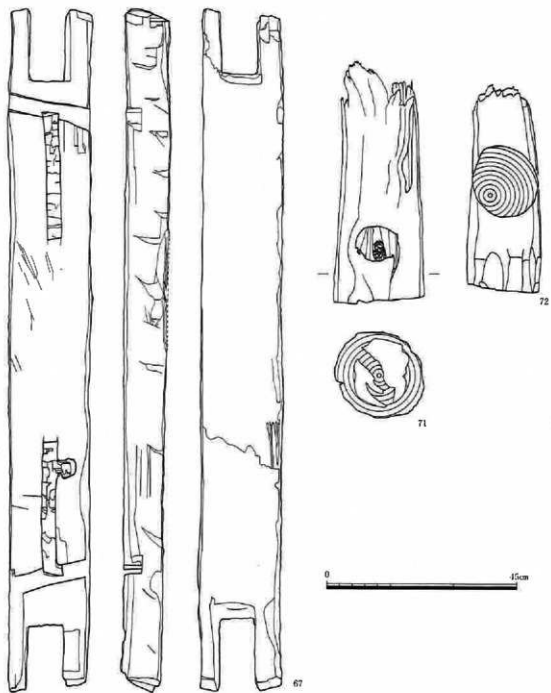
・木製品

部材(fig20)

(67)は試掘1トレンチ腐植土層より出土した建築部材である。長さ160.5cm、幅19.5cm、厚さ9.9cmを測る大形のものである。両端部を15cm、幅9cmにわたり掘り込み、柄とし、別の部材と組み合わせるようになっている。また、一面の端部付近を斜位に、幅3cm、深さ3.9cmの溝を穿ち、さらにこの溝に対して、部材の中心に向かって、同様の溝を長さ30cmにわたり掘り込んでいる。この溝の一方のみに、端部付近で、直径4.5cmの円形の掘り込みを穿っている。なお、側面の一面には、無数の刃物傷が認められる。このような形状より(67)は、建造物の柱材と考えられ、斜位に掘り込まれた溝から、小建物の妻部分の梁材が想定できる。

(71)は18トレンチのP9に残っていた柱材で、(72)は同じくP8の柱材である。

(71)は最大径21.6cm、残存高27.3cmを測る。(72)は最大径17.4cm、残存高18.0cmを測る。いずれも底部付近は削られており、多面体となる。底面は平坦となる。

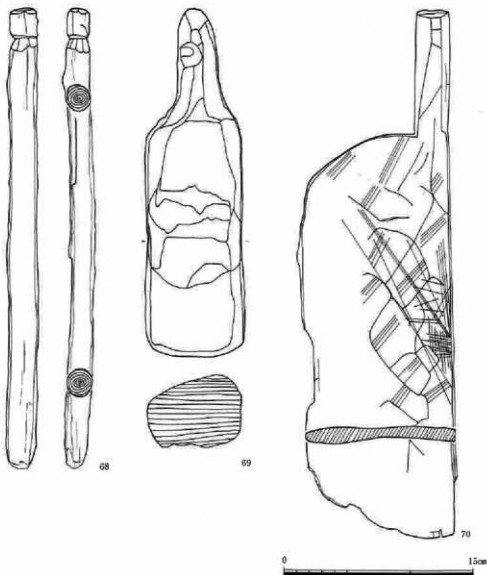


67:試掘1トレンチ, 71:18トレンチP9, 72:18トレンチP8

fig 20 出土遺物実測図(木製品)

棒状木製品 (fig21-68)

(68)は15トレンチ包含層から出土した棒状木製品で、残存長36.6cm、最大径2.0cmを測る。端部付近に3方向より削り込みをおこない、有頭状を呈している。もう一方は欠損しており不明。



68:15トレンチ, 69:26トレンチP46, 70:16トレンチ

fig 21 出土遺物実測図(木製品)

横槌 (fig21-69)

(69)は29トレンチP46に立てかけられた状態で出土した木製の横槌である。身部長18.5cm、身部幅7.5cm、身部厚さ5.8cm、柄部長8.9cm、柄部径3.3cmを測る。身部は中心部が敲打により、非常にすり減っている。

不明木製品 (fig21-70)

(70)は16トレンチ包含層より出土した木製品である。身部と柄部よりなり、その形状は船の舵に似る。身部長32.0cm、身部幅12.3cm、身部厚さ1.3cm、柄部長9.8cm、柄部幅2.9cmを測る。身部には無数の刃物痕が認められる。用途は不明。

網代 (fig22)

網代は、24トレンチSK25の底部より出土している。全様は不明であるが、底部に行くにしたがって、すぼんでいることから、ザルではないかと考えられる。編み方は幅3mmの竹ヒゴを縦にして、幅1mmの樹皮(桜か?)を1本超え1本潜りにして編んでいる。共伴する土師器(7)や須恵器(62)から、6世紀前半のものと考えられる。

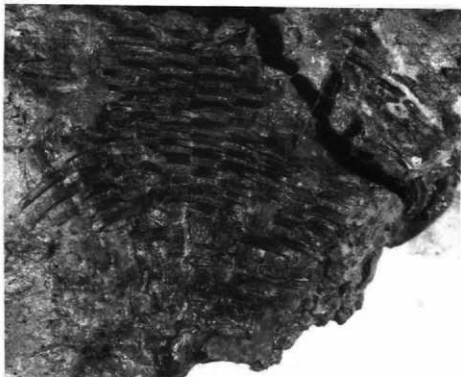


fig 22 24トレンチSK05出土網代

・石器

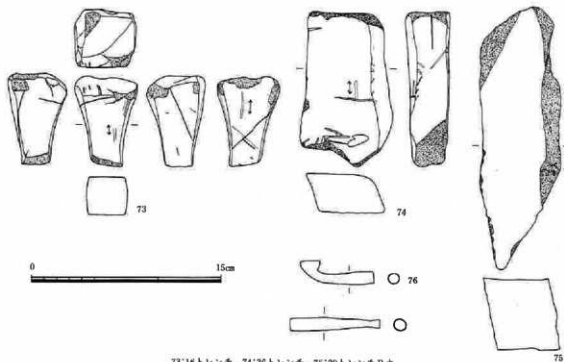
砥石 (fig23-73~75)

(73)は16トレンチ、(74)は26トレンチの包含層から、(75)は29トレンチPホ埋土からそれぞれ出土した砥石である。(73)は砂岩質で、4面ともに使用痕が認められる。(74)、(75)はそれぞれ1面のみ使用している。

・金属器

キセル (fig23-76~77)

(76)、(77)はいずれも18トレンチ表土から出土したキセルで、(76)は雁首、(77)は吸い口である。雁首の火皿は鉢状に開く。煙管部中央に接合痕を残す。真鍮製。



73:16トレンチ、74:26トレンチ、75:29トレンチPホ
76,77:18トレンチ

fig 23 出土遺物実測図(石器・金属器)

・自然遺物………(渡辺 誠)

(1) 植物遺体のリスト

このたび米原町教育委員会より調査の機会を与えられた、滋賀県米原町上多良本願寺遺跡出土の植物遺体について報告する。その所属時期は、古墳時代後期に当る6世紀前半である。

はじめに植物遺体の種名を記したのち、資料件別にその内容を記すことにする。検出された植物遺体は次の5種である。

1. とちのき科トチノキ *Aesculus trubicinata* BLUME
2. ふな科アカガシ *Quercus acuta* THUNBERG
3. ふな科ツクバネガシ *Quercus sessilifolia* BLUME
4. ばら科モモ *Prunus Persica* BATSCH
5. うり科ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* L.

1～3は野生植物であり、4は弥生時代に渡来した栽培植物である。5も渡来植物であり、縄文時代にさかのぼる。

(2) 件別の検討結果

資料の件数は9件である。このうち5のSK05はドングリ類の貯蔵穴である。

2-1) 6トレンチ, 880425

トチの種皮1個体(fig 20-1)。

2-2) 16トレンチP2, 880425

モモの種核2点(同-2, 3)。

2-3) 24トレンチSK03, 880514

モモの種核1点(同-4)。

2-4) 24トレンチSK03, 880517

モモの種核1点(同-5)。

2-5) 24トレンチSK05, 880517

アカガシ23点(同-10)、ツクバネガシ20点(同11)、不明カシ類10点、合計53点のドングリ類と、ヒョウタン仲間の果皮5点(同9)。

2-6) 25トレンチP35, 880517

不明種子 1 点。

2-7) 25トレンチ P36, 880517

モモの胚乳 1 点(同-7)。

2-8) 26トレンチ P53, 880519

ヒョウタン仲間の種子 1 点(同-8)。

2-9) 30トレンチ P71, 880528

モモの種核 1 点(同-6)。

(3) 種別の検討結果

これらの生態・遺存状態・数量などは、つぎのとおりである。なおドングリ類については、項を改めて検討することにする。

3-1) トチノキ(fig 20-1)

沢や川沿いに群生する落葉高木で、種子は9~10月に熟す。材も有用である。種子はアク抜きにより食用化できる。縄文時代中期以降現代に至るまで、程度の差こそあれ重要なテンナン源であった。滋賀県下においても、トチモチにその名残りを留めている。

出土数量は、わずかに種皮のみになった1点のみである(資料1)。果皮や幼果はみられない。

3-2) モモ(fig 20-2~7)

落葉性の小高木で、果実を食用とする。果実は7~8月に熟す。

種核の出土数量は5点(資料2~4・9)で、他に胚乳1点(同7)が出土している。

これらの計測値は、第1表に示すとおりである。長さは最小2.19cm、最大2.66cmで平均2.47cm、幅は最小2.03cm、最大2.09cmで、平均2.05cm、厚さは最小1.37cm、最大1.62cmで、平均1.53cmである。

米原町内においては、入江内湖遺跡・行司町地区において、古墳時代前期・布留式期に属す142点の桃核が出土している。これらの平均計測値は、長さ2.38cm、幅2.02cm、厚さ1.53cmである(渡辺1988)。これと本遺跡の場合とを比較すると、厚さはまったく同じで、長さにおいて0.19cm、幅において0.03cmだけ、ごくわずかに上回っているにすぎない。これらはそのサイズからみて、小清水卓二氏のいうノモモ(Subspontanea)

【第1表】桃核計測値一覧表

(単位cm、平均値は1・4・5による)

番号	件別	形態	長さ	幅	厚さ
1	2	双	2.54	2.03	1.62
2	2	半	(2.20)	1.95	(0.81)
3	3	半	(1.99)	1.80	(0.80)
4	4	双	2.66	2.04	1.37
5	9	双	2.19	2.09	1.60
平均値			2.47	2.05	1.53

モモ (*Vulgaris*) に相当するとみなされる (小清水1959)。

3-3) ヒョウタン仲間 (fig 20-8・9)

種子1点(資料8)と果皮片5点(資料5)が出土している。

この仲間には食用可能な種類 (カンビョウなど) と、不可能な種類 (千成りビョウタンなど) とがあるが、本遺跡資料がいずれに属するかは不明である。どちらの場合も容器に利用することは可能である。

(4) ドングリ類の貯蔵穴について (fig 20-10・11)

ドングリ類は貯蔵穴SK05(資料5)からのみ検出されている。貯蔵穴の大きさは直径1.5m、深さ76cmで、底に石が敷き詰められ、ザルも出土している。ドングリ類の総量は53点で、多くはない。

ドングリ類にはアク (水溶性のタンニン) の含まれている種類が多い。そして本遺跡例のような低湿地における貯蔵穴の機能は、アク抜きのためにあるのではなく、乾燥させずに短期貯蔵する点にある。堅果類を長期保存するためには、よく乾燥させた上で、屋根裏などに貯蔵するのであるが、その代わり皮むきやアク抜きの手間が倍加する。そのため秋に採集したものをその冬に食べる場合には、湿気のあるところで乾燥させずに生貯蔵するのである。53点のドングリ類は、このような短期貯蔵の繰り返しなかで、残存したものとみることができる。

【第2表】 ドングリ類の分類

民俗分類	属	種(出土例のみ)	森林帯
A.クヌギ類 製粉または加熱処理+水さらし	コナラ属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 (東北日本) (韓国)
B.ナラ類 製粉または加熱処理+水さらし		ミズナラ コナラ	
C.カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属	アカガシ・アラカシ ツクバネガシ	照葉樹林帯 (西南日本) (韓国南海岸)
D.シイ類など	シイノキ属	イチイガシ ツブラジイ・スタシイ	
	マテバシイ属	マテバシイ	

そのドングリ類の種類は、アク抜きの有無や方法の差異などを中心に、筆者は第2表のように分類している(渡辺1987)。そして本遺跡例はアク抜きの必要なC類に属する、アカガシとツクバネガシのみであることに特徴がある。C類には例外的にアク抜きの不必要なイチイガシがあるが、不明としたものはアカガシとツクバネガシの中間的な様相を示すもののみであり、イチイガシはまったく含まれていない。これらがA・B類と異なる点は、水さらしのみでアク抜きができることである。

ドングリ類は縄文時代以来の重要な食料資源であり、近・現代においても救急食料として重要な役割を果たしていた。しかしながら中間の時代の資料に乏しく、本遺跡例のような古墳時代資料は滋賀県下においても初めての検出であるばかりでなく、古くより水田の発達した湖東平野での検出であることにも、きわめて注目されるのである。

- 参考文献 小清水卓二, 1959: 古代日本の住居跡から出土する桃核について。近畿古文化論叢。559～568頁。東京。
- 渡辺 誠, 1987: 縄文時代の植物質食料・ドングリ類。考古学ジャーナル, 279, 24～27頁。東京。
- 1988: 自然遺物。入江内湖遺跡(行司町地区)発掘調査報告書, 44～48頁。米原。

謝 辞

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった米原町教育委員会の中井 均氏、資料整理に御協力下さった宮市博物館学芸員の田中禎子嬢に対し、衷心より謝意を表する次第である。

5. 調査のまとめ

調査開始にあたっては、調査地が本願寺という寺院跡推定地であり、また付近から仏像が出土したという伝承から、古代～中世寺院跡ではないかと考えていた。調査の結果、寺院の存在を示す遺構、遺物はまったく検出されなかった。しかし、従来まったく知られていなかった、古墳時代の集落跡であることが明らかとなった。

遺跡は、現在の上多良集落の東側水田地帯に展開していると考えられる。今回の調査は水路部分という極めて限定された調査ではあったが、逆におおよそ本願寺遺跡の集落範囲を知りえることができた。

上多良の東側水田の西側に遺構、遺物の検出は集中しており、東側は試掘の結果、耕土直下に礫層が深く堆積しており、天野川の氾濫原であったことが判明した。この状況は本願寺遺跡の南方に展開する中多良遺跡でも同様の結果であった。つまり古墳時代においておそらく、天野川は上多良、中多良の東側 200m の地点を南下しており、その河川敷きに本願寺遺跡や中多良遺跡が点在していたと考えられるのである。特に現天野川の堤防下に設けた20トレンチ～28トレンチで遺構、遺物が検出されたことは、このことを雄弁に物語ってくれよう。

なお、20トレンチ～28トレンチでは遺構面まで、現地表面より 1.2m であるのに対して、南へいけば 1 トレンチ～14 トレンチでは、地表下 1.5m 付近まで掘り下げなければ遺構が検出されず、おそらくは、当時上多良から中多良方向（南方）へ傾斜した地形でなかったかと考えられる。

次に検出した個別の遺構を見てみると、北部に集中してピット、土城が認められる。しかし、調査区の幅が狭いため、それらがどのような性格になるのかはほとんどが不明である。18トレンチで検出したSB01もその規模は不明であるが、柱痕の残存していたことより、掘立柱建物であることが判明した。この柱掘り方からは古墳時代前期後半と見られる古式土師器が出土していることから、同時代の掘立柱建物であったと考えられる。また調査区では、竪穴住居がまったく検出されなかった。試掘1トレンチで出土した建築部材は明らかに掘立柱建物の部材と考えられることから、掘立柱建物を中心とした集落であったことも考えられる。おそらく天野川に面した低湿地であったことにも要因していることも考えられる。⁶⁾

次に24トレンチで検出したSK05は、おそらく貯蔵穴と考えられる土壇で、出土した須恵器が6世紀前半のものであることより、この土壇に貯蔵されていたドングリも同時期のものと考えられる。縄文時代の食生活に関しては比較的その実態は判明しているが、弥生時代以降水稲耕作の伝播により米が主食となったわけであるが、他の食生活は不明に近い。今回いわゆる縄文時代のドングリピットと同じ性格の遺構が検出されたことによって、古墳時代においても主食でないにしろ、ドングリが食料として採集され、貯蔵されていたことが判明したのである。

注 ① 近年全国各地で、弥生～古墳時代の掘立柱建物の集落が検出されている。近郊では、近江八幡市の出町遺跡で、弥生時代中期、古墳時代前期の掘立柱建物が多数検出されている。ここでは本願寺遺跡同様、竪穴住居跡が一概にも検出されていない。

岩崎直也他「近江八幡市埋蔵文化財調査報告書(Ⅷ)」近江八幡市教育委員会 1985



(1) 調査地全景 (西から)



(2) 調査風景

PL.2 遺跡



(1) 12トレンチ遺物出土状況



(2) 12トレンチ全景 (南から)



(1) 15トレンチ上水道施設 検出状況 (南から)



(2) 18トレンチ遺物出土状況

PL.4 遺跡



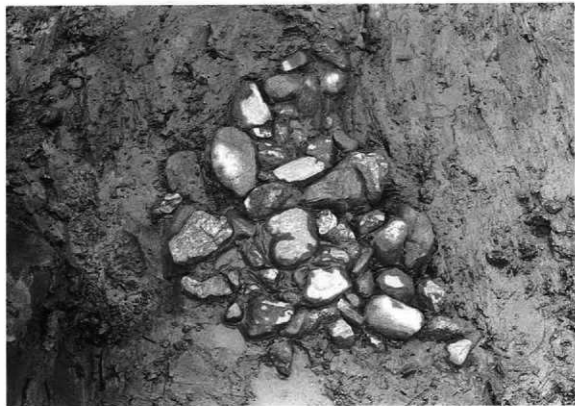
(1) 18トレンチSB01 (西から)



(2) 18トレンチSB01 (北から)



(1) 18トレンチ北半区 (北から)



(2) 19トレンチS X 01 (南から)

PL.6 遺跡



(1) 19トレンチ遺物出土状況



(2) 24トレンチP33遺物出土状況



(1) 24トレンチSK05



(2) 24トレンチSK05遺物出土状況



(1) 24トレンチS K05綱代出土状況



(2) 26トレンチP46木製品出土状況



(1) 30トレンチ遺物出土状況



(2) 試掘1トレンチ木製品出土状況

PL.10 遺物 (土師器)



1



3



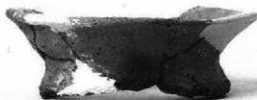
2



7



4



6

1: 26トレンチ, 2,3: 24トレンチSK03, 4: 16トレンチ,
6: 12トレンチ, 7: 24トレンチSK05



10



11



12



16



13



17



14



22

10: 16トレンチ, 11: 31トレンチ, 12: 試掘13トレンチ, 13: 27トレンチ,
14: 19トレンチ, 16: 29トレンチS D A, 17, 22: 25トレンチ



19



20



21



24



23



25



5



8



18



15



9



34



26



27



28



29

5: 15トレンチ, 8: 19トレンチ, 9: 25トレンチ, 15: 30トレンチ, 18, 26, 29: 16トレンチ,
27: 17トレンチSKO1, 28: 27トレンチ, 34: 12トレンチ



30



33



31



36



32



35



37



38



39



43



40



44



41



45



42



46

39: 27トレンチ, 40: 12トレンチ, 41: 18トレンチ, 42: 17トレンチSKO1,
43, 45: 16トレンチ, 44: 31トレンチ, 46: 試掘14トレンチ



47



50



48



51



49



53



52

47: 3トレンチ, 48: 18トレンチ, 49: 16トレンチ, 50: 試掘16トレンチ,
51: 26トレンチP46, 52: 30トレンチ, 53: 25トレンチ



54



58



55



59



60



56



61



57



62

54: 18トレンチ, 55: 試掘13トレンチ, 56: 16トレンチ, 57: 31トレンチ, 58: 24トレンチP33,
59: 19トレンチ, 60: 25トレンチ, 61: 28トレンチ, 62: 24トレンチSK05

PL.18 遺物 (須恵器・金属器・木製品)



63



64



65



66



76



77



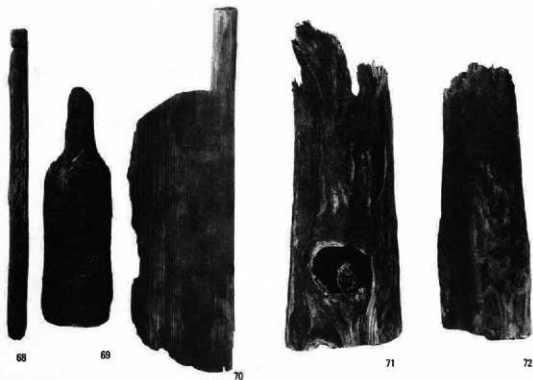
67



67'



67''



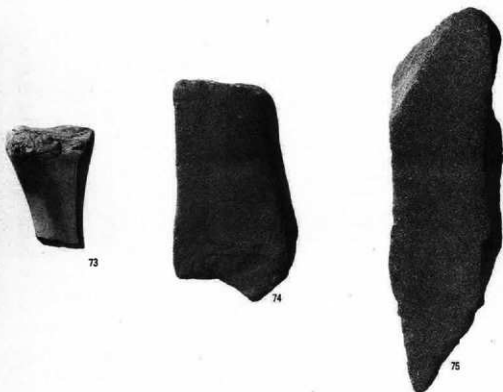
68

69

70

71

72

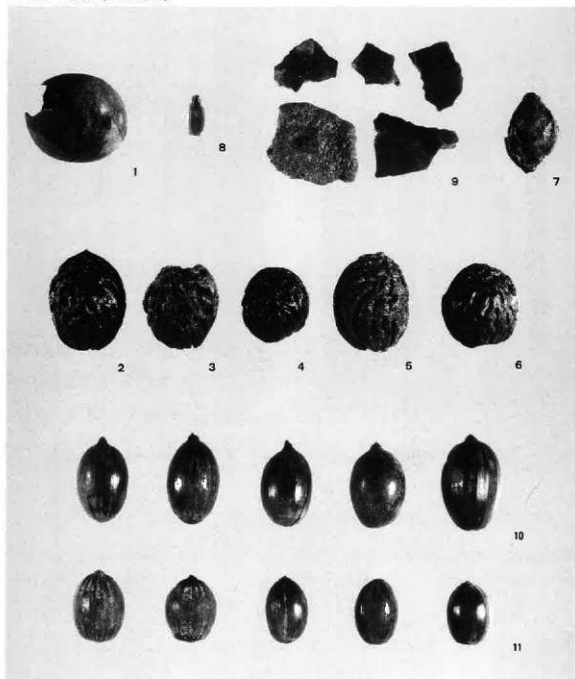


73

74

75

68 : 15トレンチ, 69 : 26トレンチP46, 70, 73 : 16トレンチ, 71 : 18トレンチP9,
72 : 18トレンチP8, 74 : 26トレンチ, 75 : 29トレンチPホ



植物遺体 (実大)

1: トチノキ, 2~6: モモ, 7: 同胚乳, 8: ヒョウタン仲間種子, 9: 同果皮,
10: アカガシ, 11: ツクハネガシ

米原町埋蔵文化財調査報告 Ⅲ

本願寺遺跡発掘調査報告書

— 県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 —

平成元年 3 月 25 日 印刷

平成元年 3 月 31 日 発行

発行 米原町教育委員会

滋賀県坂田郡米原町下多良 3 丁目 3 番地

印刷 立木印刷

滋賀県坂田郡米原町醒井 478 - 1
